筑紫女学園大学リポジト

インドネシアにおける現代華文文学への視角

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/965

インドネシアにおける現代華文文学への視角

石　　其　琳

A Perspective on Contemporary Chinese Literature in Indonesia

Kilin SEKI

前　言

私はこれまで華文文学について、各地域における継続研究を行ってきたのであるが、今回は華人人口が最多をしめるインドネシアの華人作家たちの作品を対象に、その創作意識と表現特徴について検討する。

インドネシアに居住する華人は、長い移民歴史を持ち、母国語である華文を用いて、文学作品を多く発表してきた。本論はこれまで継続して研究したように、中国現代文学に新たなジャンルとして、特に近年盛んになり最も創作が多くみられる「微型小説」の作品に注目し、インドネシア華文微型小説作品集《風は海から吹いてくる》に収録された作家の作品集を研究対象とする。まず、この作品集《風は海から吹いてくる》（注１）のインドネシア華文文学における位置づけと発展の重要性について述べよう。

Ⅰ　作品集の位置づけ

作品集《風は海から吹いてくる》のインドネシア華文文学における位置づけと発展について考える際、まず作品集の出版背景と経緯に触れてみよう。

この作品集は、2015年５月、中国国内の出版社から出版されたものである。インドネシア華文作家協会会長の袁霓氏が書いた作品集「序文一」の中に、これまでインドネシア微型小説の作品集は、1998年香港の出版社から初めて出版され、続いて2004年二冊目（注２）が同じ香港から出版されて以来、今回取り上げる作品集は第三冊目である。これまでインドネシアの華文作品数は少なくはないが、中国国内の新聞、雑誌に発表されることが少なく、国内読者の目に触れる機会

がないため、あまり知られていなかった。今回この作品集が中国「江蘇鳳凰文芸出版社」より出版発行できたことで、中国本土の読者にインドネシアの作家たちの作品に触れる機会が増え、よって今後インドネシア華文微型小説作品がより広い地域で注目され、世界華文微型小説界における位置づけに対し、極めて重要な意義をもたらされるであろうと考えている。

一方現在インドネシア国内において、文学出版業界の商業的風潮が盛んであるが、複雑な華文創作環境であるインドネシアに、新しい文体の「微型小説作品集」が出版できた事実は、実にインドネシア「微型小説文体」創作発展を推進できる一大事だと東瑞氏（現香港微型小説学会会長）がこの作品集の「序文二」で称賛し、その重要性を示唆したのである。

Ⅱ　作品集の出版背景と影響

上述したように、これまでインドネシアにおいては、３回連続して微型小説作品集が出版されている。それぞれの出版背景から、インドネシアの華文微型小説創作及び発展に影響を与えつつ、さまざまな成果をあげたといえる。本章はこの点について述べていく。

1998年《印華微型小説選》の作品集が初めて香港で出版されたのであるが、この作品集の出版は、インドネシア華文文壇において極めて重要な位置をしめている。インドネシアの有名な華人作家である暁星氏が2011年に発表した「略談印華微型小説の発展」の文章（注３）に、《印華微型小説選》の第一集と第二集の出版背景を述べ、その経緯から、インドネシア華文文学への大きな影響を与えた事実を語っている。暁星氏によると、この1998年に出版された最初の作品集は、インドネシアにおける全国から初めて系統的に編纂されたもので、52名の作家による96編の作品が集められている。それまでのインドネシア華文文壇の実態と言えば、当時の中国大陸、台湾、香港など地域の華文文壇に比べてやや遅れたとはいえ、実力ある優れた作家と作品が多くみられる。作家たちは、各自で創作活動を行い、個人の作品集としては多数出版されているのだが、華文文壇の全体としてはまとまりに欠け、新作家たちへの刺激が薄く、啓蒙作用までは導かれなかったのである。

当時有名な作家である東瑞氏がこの現実を察知しながら、対策として、作品集の編纂を考えたのである。彼はすぐれた作品を集めるため、当時有名な作家たちに創作を呼びかけるだけにとどまらず、広く作品を募集し、創作の風潮を全国的に巻き起こした。そこで有名作家の創作のほかに、その風潮ブームに乗り創作活動を始めた新人作家も多数現れ、最終的に多数の作品を収集することができたのである。これはインドネシア華文文学発展史上の「奇観」といえるほど、華文文学創作における一大運動であった。また作品集の編纂のために行った選考過程を通じて、インドネシア華文微型小説の大検閲になったことで、この作品集は、当時の華文文学研究者に対し、インドネシアの微型小説の創作における最も完全な研究資料を提供できたと考えている。

主編者の東瑞氏は、微型小説作品「第一集」の序文において、収録された作品の創作表現に対し、意識形態的、象徴的、心理描写、ユーモア、哲理、童話、詩作型、エッセイ型、古典型など

多くの創作方法を類別している。またすべての作品が優れているとは言えないが、概ね当時期において発表された大部分の佳作が集まったと確信している。

第一集の作品集が出版されて6年後、「第五回世界華文微型小説研究学会」がインドネシアで開催されたことを受け、前回出版の成果を踏まえて、インドネシア作家協会は、事前に「インドネシア国際新聞」と共同で微型小説の創作コンクールを開催したのである。このコンクールは、さらにインドネシアにおける微型小説創作の起爆剤になり、参加作品が257編もよせられたのである。参加者には熟練した作家たちのほかに、新人作者の作品も多かったという。もと詩人やエッセイ作家などジャンルが違う作家たちも影響を受け、脍炙人口の微型小説の創作を始めたのである。これはまさに、《印華微型小説選》の出版にあわせて、作品の募集活動によって、さらなる広範囲に微型小説の創作風潮が引き起こされたといえよう。作品集を出版することが、文壇の隆盛に確かな効果をもたらしたと考えられる。

上述暁星氏の文章によれば、第二の作品集には50編の佳作のほかに、コンクールの優勝作6編と推薦により発表された30編の作品が収録されている。この《印華微型小説選》第二集の出版は、再度インドネシア華文文壇史を拡大させ、そして作品がインドネシア華文文学史において、重要な文献資料であり、現代インドネシア微型小説の発展過程が反映されたのだと考えている。第一集と比べてみれば、収録作品の創作レベルが高くなり、描写題材も広範囲であり、いわゆる微型小説としての代表的な作品も多数見られたのである。また新しい作家が頻出している事実から、微型小説創作の実力が固められたことを示唆し、インドネシアの華文微型小説の世界的領域に頭角を現す段階へ一歩踏み込んだであろうと語ったのである。

第一集と第二集の作品集の出版に関して、上述したように学会の対応と作品集の編集のため、作品のコンクールを開催し、佳作を収録して作品集を編集出版した方式は、インドネシアにおける華文作品創作の原動力を高め、作品を発表できる環境を改善するきっかけとなっている。現在では、当地で発行されている各華文新聞は、すべて「副刊」という作品を発表できる版面が設けられており、新人作家を含めて、微型小説の作品はよく発表されている。

次にインドネシアの華文文学を研究するにあたって、まずインドネシアにおける華人社会の移民歴史、政治、経済など様々な要素と背景に触れながら理解していかなければならない。次章は、この点について説明を加える。

Ⅲ　インドネシア華文文学の発展について

華文文学の創作にあたって、当然作家たちには華文力の教養が欠かせないのである。そして作家たちが描写するテーマ、内容について、概ね自分たちが長い間、現地で生活した歴史、政治、経済、社会の背景要素を含め、さまざまな事情から多面的に影響を受け、その実態と深く関わる内容が表現されている。作者たちの年齢を問わず、かつて数世代にわたって、自分たちも経験しながら受け続けてきた心底に潜めた情緒を理解するためには、彼らがこれまで現地で生きてきた

歴史を知らなければならない。長年の華人移民の歴史により、インドネシア社会における華人への対処、さらに華文力に欠かせない華文教育政策を含めて、政治的な反華による迫害が繰り返されるなか、険しい道のりを経験し続けて来たのである。以下は研究資料を基に、インドネシア華人歴史の経緯を簡単に触れ、それに関わる華文創作の基盤である華文教育について述べていく。

（一）インドネシア華人の移民歴史と社会地位の変遷

インドネシアは東南アジアにおいて最大人口を有する大国であり、同時に華人の人口数は、世界最大規模と推定されている。しかしその人口数がはっきりしない現実がインドネシアならではの理由があるという。それはインドネシア華人のこの地における長い移民歴史と関係し、政権の移り変わりによる政策の改変、さらに経済と社会の激変による結果である。

インドネシアの華人について、その実態の多様性を生み出した背景には、大きく４つの理由があげられる。①は、地方別の歴史と社会構造に関係している。②は、中国および中国文化における個人的関係である。③は、職業の相違であり、④は時代的背景に関連するものである。

その①について、インドネシアでは、地方ごとに宗教的、民族的、職業的な社会構成が異なっているため、華人の社会的地位も場所によって相違する。その②は、移民した華人の個人的背景において、彼らの中国文化との関連性が重要である。出生地、使用言語から見ると、インドネシア生まれ、インドネシア語（各地方言語も含む）を母語とする「プラナカン」に対し、中国生まれ、または二代目で、中国語（共通漢語）、福建語と広東語（中国の方言）などそれぞれ母語として育った「トトッ」を区別するのである。その③は職業の面から、社会における大企業家に華人が目立つのだが、中小企業の経営者、ホワイトカラー・プロフェショナルが多く、また小説家、スポーツ界、芸能界で活躍している有名人も多いのである。ほかに少数だが、軍人、公務員及び西カリマンタン州、西ジャワ州の一部地域で農業従事者もいる。

上述のように、華人がインドネシアにおいて、その生業実態から、社会的要素とのかかわりが多様であり、また全人口、2016年では２億６千万を超える人口の比率に、華人が１～７％と推定されていることから見れば、華人のマイノリティとしての立場は、常に政治的変動に影響され、差別される対象になることが多かったのである。上述したその４点について、インドネシアの政治における時代的特徴から、華人たちの社会的現実を述べていく。

インドネシアの華人は、社会のマイノリティである。彼らがこれまで現地の反華意識によって排除され、大きな打撃を受けた現実は、時代による華人たちの扱い方に、戦前の植民地時代のその政策に深く関わっている。オランダの支配時代、または日本の支配時代と独立後に関しても、支配者側は常に分治政策をとっている。要するに、人為的に華僑または華人たちを辺縁化していたのである。オランダ領の東インド時代においては、華人は現地住民のジャワ人、スンダ人よりも社会的地位は上に位置し、当時の多くの華人は中国国籍を保有していたのである。この現実から華人は外来者として、現地にいる他民族のインドネシア人とは法的に一線を引かれ、長期的には双方の融合が困難に陥ったのである。この歴史的背景は、華人を現地の先住民族たちと長期的

に対立させ、華人の国籍は重要な国策問題であり、国内の政治、経済問題により、社会に激変が起こるたびに、華人は常に差別と攻撃の対象になったのである（注４）。

1945年から1954年まで、インドネシア政府は出生地主義を原則に、華僑の帰化を歓迎している。それについて、政府は継続的に1946年「インドネシア共和国公民と居民法令」、「インドネシア政府1947年第６号法令」及び「憲法」を頒布し、インドネシア生まれまたは非現地出生だが、現地に五年以上居住し、満21歳或いは既婚の非原住民の子孫なら、1946年４月10日から1951年12月27日までインドネシア国籍の加入に対し、拒否しなければ、自動的にインドネシア国籍を選択したと考え、華僑たちに帰化を奨励し、彼らが簡単に帰化できるような環境を提供したのである。よって、1954年インドネシア華僑が300万人いる中、約90万人が帰化したのである。

1954年から1979年の間、インドネシア国内の民族主義情緒の高揚による排華意識の強化時期であった。まず政府は1958年７月29日に「1958年インドネシア国籍法」を頒布したのである。この令の発布後、植民地時代から各商業都市にできた中華街に、中国国籍を保有する小売業の華人商店主に対し、「外国人」として扱い、地方の中小都市から退去させたのである。そして華人たちの帰化について、この法令は、前回の帰化手続きより煩雑で、厳しい条件付きの内容だったため、華僑の帰化する可能性が大きく制限されたのである。さらに1967年10月中国とインドネシアが国交断絶後、華僑の帰化はさらに制限され、1969年インドネシア側から二重国籍保有の許可を廃止し、華僑たちがインドネシア国籍を申請する場合、ジャカルタの最高検察官の許可が必要であり、かつ高額な書類費用がかかり、一般華人にとって帰化することがより困難になっている。この実態から、1979年インドネシア中央統計局の資料によれば、当時現地在住の華僑914112人がいる中、国籍が取れない無国籍者は129013人もいるし、実際現実的には国内難民となったのである。以後数年間、中国政府から彼らに対して、政治的宣伝として帰郷することを強く呼びかけたため、華人のうち約10万人以上が中国に渡り、その後インドネシア政府は華僑の移民を禁止した。

インドネシア独立後、政府は民族共通意識を強く打ち出し、政府が確立した民族建国の目標として、少数民族がいない統一国家を目指すと決めた。華人は少数とはいえ、彼らが強く持つ華人としての民族意識は、インドネシア新国民意識統一への妨害であると考えられ、約３％の存在する華人に対する扱い方が民族政策の重要な問題であった。1964年スカルノ統治時代は、現地生まれの外国系または外国血統者について、アラビア系、ヨロッパ系、華人、インド人、パキスタン人、ユダヤ人がみな団結し、融合と同化によって、国を統一すべきと強く主張したのである。

1965年９月30日共産党による軍事政変が鎮圧され、権力を掌握したスハルト氏は、1968年３月第２代大統領に就任したのだが、反共路線へ転換と左派を一掃し、政治不安と経済破綻の状況を立て直すため、対華人政策が重要な解決のカギだと考えた。華人の雄厚な資本がインドネシア経済における重要性を考慮し、華人の力を利用しながら同化をさらに強化したのである。70年代中期以後、スハルト氏は華人の帰化政策を調整し、申請条件を緩和したのである。

1980年１月31日第２号法令が頒布され、過去の国籍法令について既にインドネシア国民になっているが、正式な合法証明の未受領者に対して、正式に身分証明を与えるようになった。さらに

同年２月11日第13号大統領令を公布し、すべての外国人は1958年発布の規定に対し、18歳の現地出生または現地にすでに５年以上居住し、インドネシア語が話せる、本人から原国籍を放棄するサイン付きの証明さえ提出できれば、改籍又は帰化申請ができる規定を提示し、申請費用も減額されたのである。これを機に、華人の大多数は生存と発展のため、1981年７月で80万人もの華僑が帰化の道を選択している。また1988年には香港在住のインドネシア生まれの華僑約十数万人に対し、政府から新たに新規定によりインドネシア国籍とることが可能になったのである（注５）。

ここまでインドネシア政府はあらゆる手段をもちいて華人たちを同化させ、特別な存在感をなくそうとしている。長い間、華人たちが常に差別される環境において、不安と恐怖を抱えながら生き続けなければならないことが多く、ある意味で、心の底の暗い影を払拭できなく、それは華人らの人生観にも深い影響をあたえたであろう。

中国人の東南アジアへの移住歴史は、古く北魏（四世紀）の時代からすでに犯罪者が東南アジアへ逃亡した記録があるという。のちに唐時代では中国南部の海港と東南アジアの交易関係が密になり、東南アジアでは、中国を「唐山」、中国人を「唐人」、チャイナタウンが「唐人街」と呼ばれている（注６）。そして華人の東南アジアへの移住は、「新移民」として現在も続いている。

ここで華人に対して、彼らの多様性がある実態にもかかわらず、「唐人」などの呼称のほかに、「華商」がしばしば「華人」の同義語として使われ、華人の社会的姿とイメージが印象づけられている点について考えてみよう。文字通りこの呼称からは、「華人」といえば「富」を持ち、流通業、金融業、サービス業に従事することが多いと考えられがちである。実際彼らは大企業のオーナーや経営者もいれば、個人商店の経営など小売業の零細業者も少なくはない、要するに小市民である。この事情は、華文文学の作品内容において、作者が取りあげた人物らを見れば、華人社会の実態描写から、彼らの多様な生活的現実がよく表現されている。

スハルト時代の経済政策下、インドネシアの「華商」たちが、商工業、金融業において大きく発展できた裏には、華人企業家が軍、政界との協力的、密接な関係を持つようになった現実がある。見方によれば彼らの非国民のような差別待遇の抜け道だったと言える。このような政商結合の事例は、すでに植民時代から始まり、東南アジア各国においても普遍に存在する現象である。20世紀80年代から90年代中期、インドネシアの経済が飛躍的に発展し、よって大企業集団を含め、華商の経済的実力も大幅に増強され、多くの華人企業家を育んでいる。権利との癒着で富を手に入れた彼らは、当時福建語で「ボス」の意味である「主公」と呼ばれ、社会的に目立つ存在になった。経済成長の裏に、社会的貧富の格差が深刻になり、その解決責任は、常に政府ではなく、怒りが「華商」である華人企業家へ転嫁され、華人迫害の要因にもつながったのである。

スハルト政権は、確かに華人に対して、華僑の帰化政策を改善し、経済的発展できる空間を与えた。反面、華人に対する同化政策は政権を守るため、スカルノ時代よりも強硬だったのである。結果華人社会における華文教育、さらに華人たちのアイデンティティの破滅問題に大きな影響をあたえることになり、実際華文文学の発展にも影を落としている。以下はこの点について考える。

（二）インドネシアの華文教育と創作の問題背景

華人社会で華文教養を高めるには、重要なのは彼らが良好な華文教育を受け、華文、華語及び華人の文化伝統に接する環境を維持することが必要であった。だが、1967年スハルトが代行大統領に就任して、65年共産党が絡む政変を理由に、中国共産党と華人関係の社会的影響を防ぐ対策として、一部現地生まれの反共派華人たちは、軍人と右翼政党に協力し、華人問題を解決する最もいい方法が同化をさせるべきだと考え、華人に「去中国化」（中国の文化を消去させる）を強制し、改姓名、他民族と通婚することで、華人の特徴を放棄させるのである。そして「チナ問題解決政策立案国家委員会」を立ち上げ、強硬な同化政策を進め、政府機関を含め、華人または華人文化に対し、1967年の大統領令（華人文化禁止令）に差別的用語「チナ」の呼称が使えると規定した。それはのちの2014年３月21日の大統領令12号により、47年ぶりに廃止されたのだが、その名残は現在も消えてはいない。

この時期では、インドネシア政府が華人に対して社会同化を目的に帰化を推進するうえで、華文教育が至難の問題と考えた。華人意識を根こそぎ消去するために、華文教育を大規模で禁止し、華人たちが中国文化と触れることのできない環境を作ったのである。1966年４月には全国629か所の華文学校を閉鎖させ、すべての学校が国に接収されたうえ、外国学校の存在自体を認めなくしたのである。20世紀60年代から80年代の間、華人文化の支柱に欠かせない華文学校、華文新聞と華人団体に全面的な除去命令が下ったのだ。華人が日常生活、学校及び公共の場で華語、華文が使えなくなり、広告、看板にも華文が使用禁止になったのである。さらに華文印刷物、映像などの輸入禁止、華文新聞社も封鎖されたのである。華人たちは精神面において、公共の場で華族的宗教儀式と民族式典を行うことを禁止され、同時にイスラム教への改宗が奨励されたのである。

1969年インドネシア政府から第６号改名に関する指令が提示された内容には、帰化後も中国姓名を保留している華人に対し、インドネシアの名前へ改名することが指示された。そして政府は居住民に「インドネシア公民」と「外国系公民」とを区別する登録制度を実施したのである。スハルト統治時代において、華人団体と政党が禁止されたため、華人は基本的に政党組織権利がなかったのである。帰化した数百万の華人は改名を強要されたのだが、インドネシアで民族として公平な権利が受けられなく、彼らの身分証明書には、民族を区別するための特別な番号「０」が記されている。この華人に対し蔑視する番号は、後に1991年８月１日ジャカルタ人口局長から、60万の華系インドネシア人のこの特別番号を取り消し、彼らが平等な権利を受けられるように発表されるまで続いたのである。同時に軍の規制についても、華系インドネシア人に対する不平等な昇任制限を撤廃したのである。この一連の不平等待遇、また社会的華文文化、教育を破滅させる政策によって、長い年月における華文力の低下だけではなく、彼ら自身のアイデンティティも揺さぶられ、その精神的後遺症が深刻な傷痕となって華人社会に広く秘められたのである。

20世紀80年代に入ると、中国とインドネシアの経済貿易が展開され、海外からの華人資本が大規模で流入するなか、華文の価値が見直され、需要も高まり、1993年には経済社会連絡機構主席

から華文禁止令の撤廃が提案されたのである。その前の1991年、インドネシア政府は台湾投資者にジャカルタで台北学校を設立することを許可したのである。これはインドネシアにおいて、新たに設立された正規な華文学校である。

1998年にアジア金融危機で華人たちが甚大な被害を被ったのち、スハルト主導の軍事独裁政権が倒れた。ハビビ大統領の就任後、徐々に華人差別の法律の撤廃へと着手し、華人を非原住民とせずに、「原住民」の定義をインドネシアに対し関心を持ち、民族を忠実する人々であると広義に定めたのである。そして最も重要なのは、華人に義務つけられた国籍証明書を廃止し、「中国語」の学習を認める1999年第４号令を出し、華人に対する政策は改善へと方針を示したのである。

2000年ハビビの後任ワヒト大統領が発した1967年14号令を廃止することで、華人を差別する法令は全て無効になったのである。ハビビの任期は短い２年未満だったのだが、在任期間中には華語新聞も発行され、街で中国語の看板も見られるようになった。さらに華人の風俗文化としての「春節」が国の祝日になり、多様な華人文化関連のイベントも各地で開催できるようになったのである。

これまで述べてきたインドネシア政府の長期にわたって続いた華人に対する文化的迫害は、華文文学に多大な影響を与えたことは確実である。インドネシア華文文学創作協会会長の袁霓氏は、作品集の「序文一」でもこの問題に触れている。インドネシアの華文文学は1903年、当時清王朝維新派首領の康有爲によって始まったのである。康有為がインドネシアに来て以来、「中華会館」の造営と中華学校の創設に尽力し、華文新聞を創刊したことが華文文学の始まりである。実際インドネシアの華文文学は、二十世紀五十、六十年代頃が創作の高峰期だったといえる。しかし1965年に反華暴動事件が起こって以来、三十余年間華文、華語が全面的に封殺された状況が続き、一紙「インドネシア新聞」だけしか残されていなかった。その新聞は、インドネシア語が分からない華人たちに政府の政策を伝達するため半官的なものであった。ワヒド大統領就任後、華文新聞が十数社に増加され、新聞に「副刊」という作品が発表できる版面があるほか、青少年が投稿できる「学生園地」をも設けられている環境から、袁氏はこれから華文文学が復活できると考えたのである。

これまでの三十数年間、華文の教育環境が破壊されたのだが、華文力を持っている年代の作家たちは、苦しい環境の中でも創作を放棄せずに作品を書き続け、インドネシア華文文壇に空白の時間を残さなかった。確かに華文と接する機会が中断され、華文教育を受けられない環境が続き、華文文学の創作力が落ち、質を高めることも困難であった。だが出版された華文微型小説の作品集をみれば、インドネシアの華文作家たちの創作は、のちの創作環境の改善、そして時代の変化が現実社会における「華文」への意識重視により、これからの将来は創作者と作品数が増加すると予測できるであろう。以下はこの点を踏まえ具体的に作品をとりあげながら考察する。

Ⅳ　作品における創作意識と表現

本章は、これまで述べてきたインドネシア華人社会の歴史的現実、または華文教育と創作の関係について注目し、作品集に収録されたこれらのテーマにかかわる作品を簡略訳しながら取りあげ、作者たちの創作意識と表現について考察する。

（一）華人移民歴史的社会の問題についての描写

まず華人の移民歴史と社会問題に関連するテーマの作品をみる。

作品①：「今生来世」（今世と来生）田風 作

二十世紀の五十年代末、千島の国は風雲変色、インドネシア華人社会に急激で大規模な荒波がおしよせてきた。当時の中国政府は船を派遣し、華僑たちの帰国のために迎えに来て、母国の建設に貢献しようと思っている多数の華僑を乗せて帰った。

林忠漢と李秀娟は高校を卒業し、彼らは恋人同士で一緒に北の母国へ帰ると約束していた。しかし林が家族全員の支持を得ている反面、李は両親と親戚から大反対されたのだ。林の助けで、李はこっそり出国手続きを済ませ、出発日と集合地点も知らされていた。だが当日港で待つ林は李の姿が現れないため焦っていた。その実李は家族から部屋に閉じ込められ、外へ出られなくなったのだった。日が暮れ、第一声の汽笛が鳴ったのだが、依然と李の姿が現れない。そして第二声の汽笛がなりはじめ、船は港から離れ始めたとき、突然ある女の子の姿が現れ、「林忠漢、待って！」と大声で叫び続けている。彼女は船の出発に間に合ったのだ。

結末Ａ：ある北国の秋の休日の湖畔、白髪の夫婦が寄り添って緑の小径にゆっくり散歩する姿が見えた。二人は石のベンチに座り、湖の風景と楽しそうな遊人たちを眺めていた。突然男性のほうから「娟ちゃん、当年あなたが勇敢に小窓に登って、足の骨折を覚悟して２メーターの高い窓から飛び降りて、ぼくと一緒に駆け落ちしなかったら、今日のぼくもなかっただろう･･･」女の人は頭を夫の肩に寄せ、幸せそうに微笑んだ。「私たち今世は後悔することなく･･･」、「来生も一緒になれることを祈りたい」と、二人が同様にいった。

結末Ｂ：清明の時期、一人の女教師がはるばる南国から、深い哀愁をおびた渡り鳥のように、北の国へ飛んできたーーー街はずれに石碑が無数に建つ霊園に。

この日彼女は、黒い素服で、永遠に払拭できない心の記憶と思念を抱き、肌を刺すような寒風の中、狭長な山道を歩いて、一つ墓の前にたどり着いた。彼女は黙々と生花と果物を供え、敬虔に礼をして、じっと立って静思していた。思わず悲しくなり、涙があふれた、石碑に書いた文字を眺めたーー「林忠漢教授之墓」－－墓石には子孫の名前は記されていなかった。女教師は心を絞られたように痛感し、愁腸寸断、ほそぼそと泣きながら語った：漢さん、ごめんなさい。あの時、突然に閉じ込められ、脱出できなくて、あなたに････のちに妹が追っかけてあなたに知らせに行った･･･長かったが、私は終生未婚、一途にあなたを愛しています。私たちは陰陽の世界に

離れて、今世夫婦になれなかったけれども、来生に縁結びができるように！

この作品は悲恋物語である。作者はインドネシアの華人が直面する歴史的現実を舞台に、若い二人の人生ドラマを「悲」と「喜」二つの結末を想定してストーリーを展開している。作品が直面する歴史的現実とは、冒頭に「**二十世紀五十年代末、千島の国は風雲変色**」の表現から、上述1958年に国籍法が頒布され、反華風潮高張の時期を指している。当時は、華人たちにとって、「風雲変色」のインドネシアにとどまるかどうかは、人生に苦渋な決断を迫っていたのである。特に若い世代にとっては、これからの人生をどう生きるかが悩まされた。その時、祖国中国へ貢献する夢をかなえるために、北の国に帰る現実は、実に捨てがたい道であると作品が示唆しているのである。

この作品の創作趣旨は、単に二人の男女物語を描写することではない。実際に作者は作品の結末の前に、「**年月が流れ、早くも四十年も過ぎた。この間、北国、南国ともにそれぞれ激動とさまざまな事件が起こり、数えきれない人々が危険と苦痛の深淵に陥れられた。幸いに嵐の後に晴れあがり、人々は災難を乗り越え生き残ることができ、新たな人生を歩み続けてきた。今北国は、改革開放により発展し続けている。南島は、民主改革の道を歩み始めたのだ。**」とナレーションのように書き加えられている。作品に40年後の人生に対し、作者が想像した二つの結末は、ともに華人たちの時代の流れに沿った結果であろう。個人の力だけでは時代の波に対抗できない現実に対し、作者のこのつぶやきは、北の国中国と南の島インドネシアを新たな視点でとらえ、華人たちにとって遠く離れた二つの心の故郷の変化に、半世紀の思いが深く込められている。

作品②：「愛心」　小心（1935～）作

「事実は小説より奇なり」、このストーリーは、偶然に出会ったタクシーの運転手さんから聞いた実話だった‥‥。

1998年暴動の時、運転手さんは班芝蘭地区付近で、群衆により大渋滞になり、空前の騒乱光景を見たのだ。無数の暴民がテレビ、扇風機、炊飯器を手に、大量の衣料品、布…色々な品物を抱えている。好奇心から、彼は車を降りて状況を見に行った。実は華人経営の商店の鉄門が打ち壊され、中のものは全て暴民たちに強奪されてしまった。まだ数人の体の大きな凶悪な暴民は、中学生の華人女の子を連れ去ってレイプするのだ。この無法な状況を見て、彼は恐怖を感じすぐに現場を離れて、近くの寺廟へいき、多くの民衆と一緒に平安を祈った。寺廟を出て徘徊していると、若い夫婦が慌てて焼かれた家から逃げて、女の人は一人の赤ちゃんを抱いて彼のほうへ向かって走ってきた。この暴行に参加していないインドネシア人の友人を、自分たちの救世主と考え、すぐに赤ちゃんを彼に「この子を救ってください」と託して、恐怖とパニック状態で逃げ去ったのだ。彼は愕然と赤ちゃんを抱いて、一瞬途方に暮れてどうすればいいかと迷った。赤ちゃんは、周りの世界が転覆されたように騒動している様子を知らずに、穏やかに熟睡している。彼は辛くなって、赤ちゃんを抱いてその両親が戻ってくるのを待ったのだが、日が暮れても一向に戻ってこなかったので、家に連れて帰ることにした。彼は家に帰り、妻が驚いて、みんなはテレビ、炊

飯器を持って帰っているのに、あなたはどうして華人の子供を連れ帰ったの？と聞いたのだ。彼は、この子の親は可哀そうに我々族群の暴行で、家を失い、命も危ない、だからこの子の安全のため、知らない私に託したのだ。私たちは彼らを助けるべきだし、民族を区別しないで、この子を自分たちの２番目の子供と思えばいいし、私たちと同じものを食べさせればいいのだ。その後、子供は健康で彼の家で成長した。彼の娘もこの子をかわいがって、子供は娘と一緒に、彼らをお父さん、お母さんと呼んでいる。彼らはその子に華人の名前「BO BO HO」を付けたのだ。

二年後のある日、彼は町の店で食事をとった折、突然華人の男性が目の前に現れて、彼にあの暴動の日、若い夫婦から子供を託した人かを尋ねたのだ。急だったので少し驚いたのだが、すぐに「そう、僕です。今もその子はうちにいるんだよ」と答えた。子供の父親は感激のあまり泣き出して、「子供を見せてくれませんか？母親は毎日あの子のことを思って食事ものどを通らなく、夜も眠れないのです」。運転手さんはすぐに子供と会うため彼を家に連れていったのだ。子供を見てすぐに抱き着こうとしたのだが、子供は知らない人と思って、こわくて泣き出しながら嫌々で彼の手を振りはらい、近づこうとはしなかった。仕方なく父親は一旦帰って、翌日夫婦で子供に会いに来た。付き添いの親せきは運転手さんにこれまでの扶養費用をすべて支払うと言ったのだ。運転手さんは少し不機嫌に「これはお金の問題ではない。もしお金が欲しかったら、もうとっくに子供を売り払ってしまい、今日まで待つだろうか？私たち家族がこの子に対し愛情いっぱいに育てたつもりだし、お金で計算できるものではない。うちは裕福ではないけど、この子一人ぐらいは何とかやっていける。別にこの子が来たから特別負担が重く感じたこともなく、逆にこの子を救ったことで大変うれしく思ったのだ」と言った。

それから子供と親は、子供となれるために、母親はこの運転手さんの家に、数か月一緒に生活をしてから子供を家に連れ帰った。そしてその時、養母もしばらく付き添って一緒に生活をしたのだった。それからこどもの父親は運転手さんと義兄弟になり、子供は運転手さんの義子にもなった。

作品②に注目したいのは、作者が「実話」をもとに、あの世界中を驚かせた恐怖の反華暴動事件現場で起こった人間ドラマをテーマに、インドネシア社会の表と裏の底にある人間の感情を反映し、繊細に表現した点である。

これまでインドネシアでたびたび起こる反華暴動と虐殺は、今始まったことではない。それぞれの暴動の発生背景は異なるが、支配者への対抗、民族間の矛盾のほかに、政府側の差別的弾圧政策、経済格差で華人が標的になったなど多方面に由来するのである。1740年にはオランダ支配時代に、厳しい政策に反発した華人が蜂起した結果、オランダ人によってジャカルタに在住の華人約一万人が虐殺された有名な「バタビア華僑虐殺事件」となった。当時血が川を真っ赤に染めたほどの虐殺事件で、華人は「紅渓惨案」と呼んでいる（注７）。その後、日本支配の1942年、日本軍がスマトラ島で華僑と抗日組織を大量に逮捕する事件が発生し、華僑とインドネシア人約2000人が逮捕され、545人がシアンタール収容所に拘禁され、華僑抗日協会の創設者で主席でもある陳吉梅をはじめ、幹部十数人が1944年３月に銃殺されたのだ（注８）。1973年イスラム教育が

盛んであるバドゥンでは華僑・華人と対立し、８月５日から８日にかけて反華僑・華人の暴動が起こった。1974年日本の田中角栄首相の訪問に対しての反日暴動が起こり、その怒りが排華運動へと繋がってしまったのだ。作品②の舞台は、その後1998年５月に起こった最も悲惨なジャカルタ大暴動である。

長期にわたって、インドネシア社会の排華意識が強く、ここに住む以上、反華感情が避けられないと同時に、暴動が頻繁に起こり、さまざまな迫害を受けてきた華人たちは、どんな心境で現地に留まり、数世代にわたって恐怖と不安の中で生き続けてきたのだろう。作者自身はインドネシア生まれであり、この暴動事件の経験者である。作品の中の若い両親は死の間際に立った時、あえて最愛の子供を「暴民」側に託すのを描写している。その表現で作者は、その両親の複雑な心境を通じて、民族に違いは存在するが、人間として共通する心があると確信しての期待と信念を示唆している。それがこのインドネシアの地で、華人たちが生き続けられる理由であり、作者が作品②に「愛心」の言葉をタイトルにするゆえんである。

（二）華文教育の文化問題についての描写

以下は、華文文学の創作に欠かせない、華人意識を育む華文教育に関連する作品をとりあげる。

作品③ :「鍾さん」 黄景泰（1978～）作

もうすぐ卒業なのに、鐘さんは続けて２、３週間授業を休みにしている。先生と同級生がみな彼女の欠席理由がわからないので、クラスで同席の王さんは彼女の察を尋ねてみようと考えた。週末、鐘さんの部屋の前で「鐘さん、あなたが欠席したから、みなさん大変心配しているので事情を話してくれ、ドア開けて」と何度もノックしたのだが、反応はなかった。携帯で連絡をとってみても返事がない。

卒業論文と口頭試問の準備に追われていたある日、突然王さんの携帯が鳴った、「王さん、久しぶり」「ああ、鐘さん、最近はどうしたの、数か月も授業に出てない･･･」「ああ、心配いらないよ、いま離島で通訳しているの、給料がよくて」彼女は王さんに自分の状況を詳しく説明した。「しかし何にも説明なしで、勝手に休んでよくないと思うよ、待遇のいい仕事を見つけたといって、すぐに漢語の先生なるのを放棄するなんて、あまりにも無責任じゃないの？」「そんなの関係ないよ、私はアルバイトをしながら大学で何年も漢語を勉強したし、また何年も先生を務めても給料は安かったのよ。今いい仕事があるから、チャンスを逃がすわけにはいかないの」「しかし、漢語は、私たち華族の文化財産、もしみなが漢語を教えることをやめたら、漢語の先生はどんどん減ってしまい、また我が国の漢語教学の第二次断層になるじゃないか？教職業の給料は高くないのだが、比較的に安定しているのだし、少し慎重に考えたほうが･･･」「いいえ、チャンスがもっとも大事ですから･･･」

年末のある晩、クラスが市内の四つ星のホテルで卒業式を行うため、王さんは少し早めに会場についた。その時、偶然に一階で鐘さんにあったのだ。「おめでとう、大学卒業して学位を獲得

したね」と鐘さん。「ありがとう、遠いところから式に参加してくれて、うれしいです」と王さん。「王さん･･･私･･私失業したのよ。あの会社の営業に問題があって、政府から営業停止にされたのです。これからどうすればいいかわからない」と、鐘さんはことばに詰まって、悲しそうな表情でいった。式中、舞台の王さんたちの華麗な卒業式の礼服と四角帽子を見て、舞台の下にいる自分の無力を感じ、失望と悲傷、そして後悔をしていた。

この作品の作者はインドネシア生まれで、幼少からインドネシア教育を受けている。以後独学で二十数年漢語を学んで、2012年中国廈門大學海外教育学院漢語学科卒業し、現在も英語と漢語の教師を務めている。作者が生きた時代とは、華文、華語が全面禁止された時代であり、独学した苦しい経験から、漢語教師の必要性を痛感している。作品中の会話で鐘さんに「待遇のいい仕事を見つけたといって、すぐに漢語の先生になるのを放棄するなんて、あまりにも無責任じゃないの？」漢語人材が必要とされる中、安易にお金に釣られて漢語教師の資格を放棄してしまったことに対し、「漢語は、私たち華族の文化財産、もしみなが漢語教えることをやめたら、漢語の先生はどんどん減ってしまい、また我が国の漢語教学の第二次断層になるじゃないか？」と警鐘を鳴らしたのであろう。華人としては、血縁で繋ぐだけの華人ではなく、華文とそれを伝承できる文化は捨てがたい重要なアイデンティティであることを作者は示唆している。

作品④ :「師生の間」 開荒牛（1923～）作

庄則民先生はやっと再就職先が決まり、生活を維持できるようになった。だが出勤初日から、失眠して、悩みと困惑そして悔やむばかりだった。二、三十年前の彼は語学の教師だったのだが、華校が閉鎖されてから、転々と小売りの商売を何度もしたのだが成功をみることはなかった。･･･知人の紹介で、大規模な国際貿易会社社長の中国語秘書に就職した。この会社は顧客と英語、日本語そして中国語をやりとりで使うのだが、中国語の手紙が少ないので、仕事は楽だと喜んでいた。しかし社長の名前を聞いた瞬間に、彼はポカンと落ち込んでしまったのだ。すでに忘れていた二、三十年前の一幕が彼の頭に浮かびあがったのだ。社長の梁金海は、五年生で作文も字も書けない最も出来の悪い生徒だった。一度怒って彼を呼び出して「あなたみたいな落ちこぼれは、将来社会で仕事がなく、飯も食えないし路頭に迷うだろう」と叱った。しかし今はその言葉の逆で、彼に対して、自分より高い地位にいるので、昔言い過ぎた点を、謝まるべきではないかと･･･だが社長は、なにごともなかったように、庄さんと呼びながら、彼を丁寧に扱ってくれた。

一日目の仕事で中国語の手紙を書くことになった。梁社長は手紙の要旨と内容を説明して指示をだした、あたかも三十年前自分が彼に教えた時のようだった。いいものを出さなければと必死に書き上げた。これで褒められるだろうと･･･しかし社長はその完成稿を少し眺め彼に会釈をして、社長室からの退出を示した。するとすぐに若い女性秘書に「ピーター林にこの手紙を英語に書き直して･･･」と命令したのが聞こえたのだ。その夜、彼は眠れなかったし、自分のことがわからなくなってしまったのだ。そしてこの世界のこともわからなくなった････

主人公は誇るべき漢文教養がやっと発揮できる職場を獲得したと思ったのだが、逆に自尊心を

損ねてしまったのである。時代の変動と厳しい現実が人々を翻弄する虚しさを表現したのである。

作品５：「感情ホステス」 凡若（1941～）作

藍虹はノートパソコンをもち、公園の石椅子に座って、携帯の番号を弄ったりしていたのだが、急に間違ったようで、モニターに変な信号が動いた。「ディ‥」と音がして、「タイムトンネル」の文字が出現し、「過去・現在・未来」と三項目が見えた。彼は何となく「未来」をクリックし、また「国名」、「年代」の選択が出た。ふと考えて、「インドネシア」と「2008」を選択してログインした。すぐに、「ディ」という音がして、「どこだ？」と目の前の景色が変わって、ジャカルタの花屋さんだった。「紫姫苑」という店で、「感情ホステス付き」と書いてあった。（中略）

「私は綺綺といます、ここに座ってもいいですか？」と、一人のきれいな若い女性が目の前に現れた。藍虹は吃驚して尋ねた「感情ホステスは、酒場のホステスなの？」「いいえ、私たちはお茶だけを付き添います、お客さんと話すだけで、将棋を一緒にするなど、お客さんから失礼な言動があった場合、すぐに拒否して離れることができるのです。この茶館は私たちを守って、お客さんを追い出すことができます」。「ああ、あなたの華語は上手ですね、どこで覚えたの？」、「ここの感情ホステスは、みなインドネシア語、華語、と英語が話せます。それにみな大卒です。」、「そうか！意外だったな！」「現在インドネシアの学校はすべて三語教育です、華語は必修科目です、だから三階の中文書店に本を買いに来た人の大半は大学生ですよ。あなたはよそから来たのですか？」、「いいえ、過去から来たのです」、「だからあなたのパソコンに携帯、みな古いのですね･･･そうだ、うちの社長は女性で、中国から来たのです、中国がWTOに参加して以来、インドネシアには中国からの商人の投資が盛んです」。（中略）「チップは？いくら差し上げたらいいの？」、「いいえ、給料制です。知識が必要な仕事で、私たちもしっかり勉強しないと」、「社長さんは先見の明があるのね」と藍虹は言いながら周りを見ると、店は満席で外国人も多かった。（中略）最後にボタンの押し方を教えてもらって、彼は「現在」に戻ったのだ。

2000年代、中国の経済発展により、インドネシアとの経済連携が強化された背景のもと、華文は新たに重要視され始めたのである。ハビビ民主化時代に、華語新聞が出版され、街の看板に漢字も見られるようになった。1975年にジャカルタ郊外に開園されたインドネシア文化を網羅した公営テーマパーク「タマン・ミニ・インドネシア・インダー」に、華人文化に関する展示はなかったのだがが、2006年からやっと政府の許可により、園内で「印華文化公園」の建設が始まり、多数の華人文化とルーツを表象する展示物が次々と完成され、現在も建設が続いている。これでインドネシアにおける、華人の国民としての存在が確立されたといえよう。

作品④と作品⑤ともに、この時代背景に関わるテーマである。作品④の主人公は時代の変化に追いつかず、まだ華文教養があるだけでは自尊心をとり戻せなかったのである。作品⑤の作者は現地生まれ育ちのため、中国大学の通信教育を受けた世代である。作品に主人公が2008年のインドネシアの「未来」へタイムスリップした描写から、華文が本格的に活躍できる時代になるのを

期待したであろう。

結　語

これまでインドネシアにおける華人に関する移民歴史と社会問題などを述べてきた。華人・華文化が直面した波乱万丈な時代での被害は、2000年以後のインドネシアの民主化と中国の経済発展によって、大きく変わり始めたのである。2006年の国籍法の改定で、民族の解釈が出生地重視となり、民族の出自を問わなくなった。またこれまで政治の裏舞台におかれた華人は内閣へ、地方分権により国会議員、地方首長にも次々と選出され、表舞台に進出して存在感が確立されている。さらに中国との関係が重要視されるうえ、華人の懸け橋としての役割も増大している。政治政策の改革から華人の社会的地位に多大な影響を与えている中、作品集において、作者たちは社会変化の実態に沿って、多様なテーマで華人たちの生活様相と意識問題を描写している。その点について次の課題でとりあげたいと考えている。

注

注１：《风从海上来》（風は海から吹いてくる）钦鸿　闻彬 主编　江苏凤凰出版社　2015

注２：《印华微型小说选》第一集（1998）と第二集（2004）同じ 東瑞氏主编香港获益出版社有限公司出版

注３：《世華作家交流網》―≪略谈印华微型小说的发展≫ 2011年７月８日（2017年６月20日 アクセス）
http://www.ausnz.net/worldchinesewriters/article_detail.asp?id=203

注４：《華僑華人の事典》（丸善）Ⅱ－３東南アジア「インドネシアの華人」を参照

注５：《世界華僑華人簡史》庄国土主編 第４章 「从华侨社会到华人社会的转型」を参照

注６：《国家と移民》田中恭子著　序章を参照

注７：《華僑・華人辞典》（弘文堂）「ジャカルタの華人華僑」（P333）を参照。

注８：《華僑・華人辞典》（弘文堂） ９月20日事件　（P217）を参照。

主な参考資料

「華僑・華人事典」 可児弘明・斯波義信・游仲勲 編　弘文堂　2002

「華僑華人の事典」 華僑華人事典編集委員会　丸善出版　2017

「世界华侨华人簡史」 庄国土 主編　暨南大學出版社　2014

「華僑」 游仲勲　講談社　1991

「国家と移民」 田中恭子著　名古屋大学出版会　2002

（せき　きりん：アジア文化学科　教授）

インドネシアにおける現代華文文学への視角

石　　其　琳

A Perspective on Contemporary Chinese Literature in Indonesia

Kilin SEKI

筑紫女学園大学
人 間 文 化 研 究 所 年 報
第29号
2018年

ANNUAL REPORT
of
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE
Chikushi Jogakuen University
No. 29
2018